



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

特集

ライブ! ミュージアム論

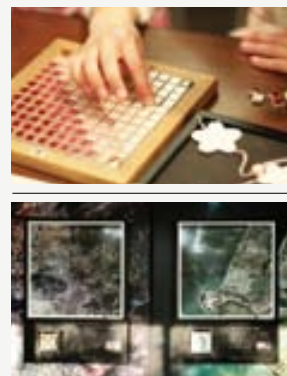
vol. **21** | 季刊 2011 秋





ライブ! ミュージアム論

土は水を得て形となり、火を通してやきものになる——。
 常滑の土を使い、ものづくりをすることから一歩を踏み出したINAX(現 LIXIL)は、1986年に「窯のある広場・資料館」を開設。以降、「世界のタイル博物館」「陶楽工房」など施設を充実させてきました。そして2006年「土・どろんこ館」「ものづくり工房」を加えたINAXライブミュージアムが、新たにスタート。ものづくりの心を伝えるミュージアムとして、5年の月日を重ねてきました。これからもライブ!であるために、大人にも子どもにも楽しんでもらうために今、ミュージアムについて考えてみます。



【陶楽工房】陶を気軽に楽しむ工房、タイル絵付け、モザイクアートなどを体験できる。予約なしでできる「自由時間」での気軽な創作も人気。
 【土・どろんこ館】土の魅力、不思議さをワークショップなどを通して再発見する館。建物内外にも土をふんだんに使い、その

【世界のタイル博物館】タイル研究者・故山本正之氏が常滑市に寄贈した世界各国のタイル約6千点を管理・研究・公開。紀元前から近現代の装飾タイル1千点を展示する、日本唯一のタイル博物館。
 【窯のある広場・資料館】1921年に築かれた建物は、21mの大煙突と内部に大きな窯を持つ。

華やかな染付古便器や、常滑の土管の産業史に焦点をあてた、子どもにもわかりやすい展示に11月、リニューアルされる。館内にも美しい窯の内部も必見。



[特集] ライブ! ミュージアム論

- 02 ライブミュージアム 5つのスタイル
- 04 より体感できるミュージアムへ、これからも進化を続けます。
ミュージアムのこれから 辻 孝二郎館長
- 05 ミュージアムを「豊かさの循環装置」に
齋藤 恵理さん
- LIVE SCHEDULE
- 06 これからの催し
企画展 青一空と水とやきものの始まり
企画展 青の魅惑—イラン、トルコ、ウズベキスタンのやきもの
- 07 だいすきトコナメ・アート展〜トイレはみんなの舞台だ!
光るどろだんご「秋の風」
- LIVE REPORT
- 08 開催報告
光るどろだんご大会2011
2011年 やきもの新感覚シリーズ
- 09 みんなでどろ遊び どろんこ広場で遊ぼう!
フォトコンテスト2011「私の好きなライブミュージアム」
入賞・入選作品決定

CONTENTS

INAXライブミュージアム
NEWS LETTER

vol.21 季刊秋
2011

表紙写真

知多半島のあちこちを撮影でめぐった写真愛好家のお二人。最後にライブミュージアムに立ち寄ってくれました。思い出に残るベストショットは撮れたでしょうか。

撮影:村山直章

常滑から*

20

かつての風物詩「渡り廊下」



生地屋から届いた成形済みの植木鉢を運ぶ文四郎製陶所

明治から昭和半ばにかけて、土管や焼酎瓶、タイルなどが大量につくられた常滑。成形から焼成までの作業効率を上げるため、造り納屋(成形小屋)から窯一階の乾燥室まで、隣り合う建物の二階同士、道路をまたいで廊下を渡し、台車に製品を乗せて往來していました。やきもの街、常滑ならではの光景でしたが、高度経済成長期以降、窯業が下火になると次第に姿を消していきました。

そんななか、植木鉢や外装タイルをつくる文四郎製陶所では、一般道の上に架けられた渡り廊下が現役で活躍しています。土管や壺をつくっていた昭和30年ごろは、切り抜いた天井から二階に持ち上げていたそうですが、現在は簡易エレベーターを使い、乾燥室へ製品を運んで窯詰めまで保管しています。

土が届くと一気に成形するため、「この渡りが無いと仕事にならなう」と社長の山本孝二さん。大型化した車がくぐり抜けられるよう、廊下を高く渡し変えながら使い続けていきます。

立花嘉乃(企画担当)

* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



手を動かさないと
わからないこと。

原点はものづくり。その重要性はI N A Xが受け継いできた。だからものづくりの楽しさを多くの人と分かち合いたい。こねる、形づくる、塗る、磨く、並べる。冷たさやぬくもりを確かめる。まず自分の「手」を意識することの大切さに気づいてほしい。ライブミュージアムには、そんなものづくりの原点を体験する機会がたくさんある。



1 大人も子ども楽しめる「光るどろんどろん」色づけしただんごが、磨けば磨くほど美しく光るという不思議に多くの人が魅了される。完成しただんごを、家族と、友

だちと、見せ合って自慢し合うのも楽しみの一つ。
2 見ただけで心が弾む色とりどりのモザイクタイル。色を選ぶ、タイルを並べる、アイトは心を自由に。



3 1日ばかりでルービィ・ラストのタイルを制作する本格的なワークショップの「コマ」指導するのはものづくり工房のスタッフ。

地域とともに。

土・どろんこ館、日干しれんがの壁。一つ一つ表情のある日干しれんがは、ワークショップに参加した地元の人たちの手でつくられた。窯のある広場・資料館の、かつて土管を焼いていた窯の中では、若者たちが音楽を奏で、夏休みに人気の「どろんこ遊び」には、顔馴染みのボランティアが駆けつける。常滑の土と人によって生まれ、育まれてきたI N A Xは、「常滑」という地域に格別の思いがある。だから、常に地域とともにありたいと思う。5年前、ライブミュージアムのスタートにあたって、多くの地元の人と話し合った。「ファーストオーデイエンスは地域の人たち」。その気持ちを忘れない。



7 ライブミュージアムの敷地入口に立つて土・どろんこ館を見上げると、まぶし目に入る版築の擁壁と建物の壁。一は

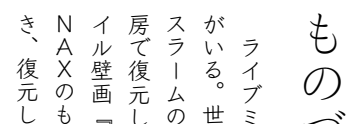
がね土と呼ばれる常滑の土を使ってつくられた。土が這い上がり、すくような迫力、風雨にさらされ、年月とともに表情が変わっていくのが魅力。
8、9 参加者約220名、6日間のワークショップでつくられた3000個の日干しれんが。皆でつくったれんがが、土・どろんこ館の壁になり建物とともに長い年月を生きていく。
10 リュートの音色が中世ヨーロッパに誘う毎年恒例のニューイヤークンサート。
11 「光の海」をテーマにした灯のページェント。4500本のキャンドルがどろんこ広場を幻想的に演出した。



11



10



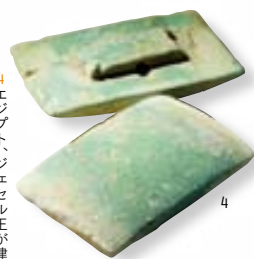
9

ライブミュージアム 5つのスタイル

“ここにしかないもの”をめざして
5年の月日の中で、作りあげた5つのスタイルです

時空を超えた
美しさに迫る。

紀元前2650年のエジプトで、ピラミッドの地下通路に張られたタイル、人々が憧れた鮮やかな染付を存分に施した明治・大正期の古便器。ものづくりの背後には、人間の夢やロマンが詰まっている。時空を超え、国境を超えて、人が生み出した美しいものたちに、静かに向き合う時間がある。



4

4 エジプト、ジェセル王が建造した階段ピラミッドの地下、閉ざされた暗黒の空間に眠っていた。はるか4600年前の世界最古のタイル。
5 世界のタイル博物館1階は、「裝飾する魂」をコンセプトに、6つのタイルの時代、その空間を体験する場。その一つ、神秘的な青で彩られたイスラームのドーム天井。
6 明治期、戸外から家の中に入ってきたトイレを清らかに保ちたい。そんな日本人の清浄思想が一翼しい便器を出現させた。日本人の美意識を再発見する染付古便器。



5



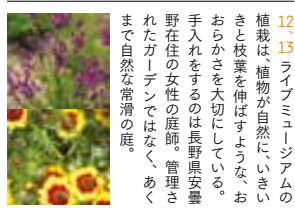
6

佇むだけで、しあわせになる。

ここは塀のないミュージアム。緑の芝生広場に映える常滑独特の黒壁の角窯。広い空。大きく茂った欒の木。だれでもいつでも、ここに佇むことができる。ここに来れば、ほっとできる、そんな暮らしに寄り添うミュージアムでありたい。



12



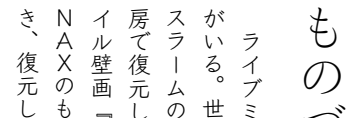
13



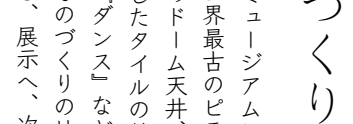
13

ものづくりを受け継ぐ。

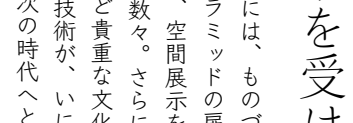
ライブミュージアムには、ものづくり工房という強い味方がいる。世界最古のピラミッドの扉、幾何学模様美しいイスラームのドーム天井、空間展示を飾るのは、ものづくり工房で復元したタイルの数々。さらに、岡本太郎のモザイクタイル壁画『ダンス』など貴重な文化財の修復も手がける。I N A Xのものづくりの技術が、いにしえのやきものを読み解き、復元し、展示へ、次の時代へとつなげていく。



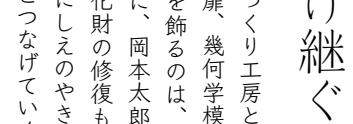
14



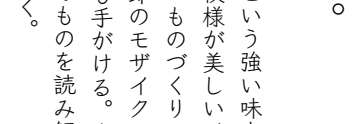
15



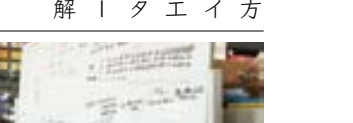
14



15



14



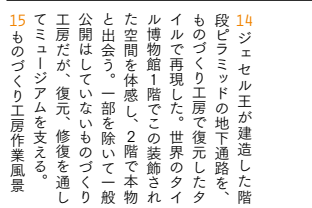
15



15



14



15



15

より体感できるミュージアムへ、これからも進化を続けます。



窯のある広場・資料館

2011年11月6日

「日」 本の近代化を支えた常滑の土管」をテーマに、1階の常設展示をリニューアルします。上下水道や鉄道交通網の整備、農地乾田化による食料増産など、日本の近代化に重要な役割を担った土管と、土管の大量生産を支えた常滑のやきもの産業の技術革新を、当時の機械や窯と共に紹介。子どもたちにもわかりやすい解説と楽しい展示空間をつくりまします。



建築陶器のはじまり・資料館

2012年4月

「20」 世紀建築界の巨匠、フランク・ロイド・ライトの代表作の一つ、「帝国ホテル



テラコッタパーク

2012年4月

「花」 や幾何学模様、動物など、コンクリート建築の外装を飾った大形の建築陶器―テラコッタ。関東大震災から第二次大戦までのおよそ20年間、日本の洋風建築を華麗に飾りました。今は貴重な文化遺産となったテラコッタに、青空の下、間近で出会えます。1934年に伊奈製陶が製作した松坂屋横浜のテラコッタ(2m×5m)を中心に、数々のテラコッタを当時の建築写真とともに芝生の広場に展示します。かつての華やかな都市の様子を思いを馳せながら、ゆっくりとめぐってください。初めてテラコッタに出会う子どもたちにも、きっと楽しい場所になるでしょう。

ミュージアムのこれから



INAX ライブミュージアム館長 辻 孝二郎

今年の夏も、多くの方にミュージアムを楽しんでいただいた。体験型の教室は連日満員状態で、にぎわった。ミュージアムの見学と体験教室の違いはどこにあるのだろう。体験教室は明らかに深いコミュニケーションの形態だと思ふ。親子、友人、夫婦、恋人が集まり、手や体を動かしお話しながらも時に真剣に、一緒にモノをつくる。単なる言葉や文字の交換、メールのやり取りではできない実感に満ちた交流がそこに生まれている。そういうところが受けるところなのだろう。東日本大震災以降、人間の関係が問われている。より深いコミュニケーションが求められている。不安な時に家族や仲間ほど大切なものはない。これからのミュージアムを考えるとコミュニケーションの深さが問われることになるだろう。知識を得る、美しいものを見る、歴史を知るミュージアムから、家族や仲間と豊かな時間を共有し、同一体験や楽しい展示で会話が弾み、記憶に残るミュージアムへ。そういう舞台にミュージアムを進化させる必要がある。またミュージアムスタッフとの触れ合いや、気持ちのいい空間、日常にない自然やゆったりした時間など、人間の心に配慮したミュージアムづくりが求められている。より心の深くに届くミュージアムへ。難度は上がるが、チャレンジしたいと思ふ。

ミュージアムを「豊かさの循環装置」に

齋藤 恵理

ミュージアムの意義

ミュージアムには、培ってきた文化や宝を「保存・継承する」という存在意義が根本にあります。保存・継承するために、保存とは本来相反するのですが、「展示」して感動や素晴らしさをみんなで共有するようになりました。さらに「参加体験型の展示」がアメリカから始まります。そして今では、ミュージアムの企画や運営に市民が参加する「市民参加」へと、ミュージアムの社会的意義は確実に広がってきています。

現代的課題

―地域生活とのリンク

ミュージアムの現代的な課題は、過去のものを見せるだけではなくて今の地域の生活とうまくリンクしているかです。先程、INAXライブミュージアムを案内していただき、活動状況などをお聞きしました。「ライブ」というと、一つには「実体験」「本物」



SAITO Eri

日本ミュージアム・マネジメント学会理事・事務局次長 (株)乃村工芸社プランニングディレクター 沖縄平和祈念館 (調査・基本構想・基本設計)、釧路市こども遊学館 (管理運営計画) 宇都宮市妖精拠点施設 (機能構成等調査) 等を手がける。 主な受賞歴に2004年DDA研究賞「かはくアクティブ化計画」 2005年DDA研究賞「釧路市こども遊学館・市民参加型運営」 2007年グッドデザイン賞コミュニケーションデザイン部門「YKKブランド体験スペースFastening Experience」等。

という意味、もう一つは「生きている」という意味があります。つまり、いつも進化して成長していくという意味合いでしようか。

「豊かさの循環装置」として

たとえば歴史的建造物が壊される。すると、それは永遠になくなってしまいます。そこで、テラコッタがあれば、それを収集し展示する。古便器もまた同じ。こうした歴史の断片を記憶し保存していく活動は、現代社会の動きとリンクし社会的にも非常に意義あることです。あるいは地域の産業遺産を展示するなか、過去にとどまらず「土」をテーマに地元のアーティストとコラボレーションをしたり、OBの方が技術を伝承したり、子どもたちに「土」とのふれあいの機会を提供したり。そういう活動は今日的で意義深いと思います。地元の食材を使ったレストランがあり、コミュニティにコンサートなど質の高い場を提供し、地域とつながっていく。これも、企業ミュージアムの姿として素敵です。

私はずっと、ミュージアムが「豊かさの循環装置」だったらいいなと考えています。好きなミュージアムの一つに、寄付金で運営されているモントレー・ベイ・アクエリウム水族館(米)があります。そこは水生動物研究所が併設されていて、ボランティアは世界最先端の科学者から直に海洋生物の講義を受けることができ、それをお客様に還元しています。さらに、水族館に行けないような近くの貧しい人たちが住む集落に、アウトリーチ (outreach) と言いますが、出張サービスをしています。ミュージアムという活動体を通して、みんなが持ち寄ったお金、知、経験、体験、そして想いといったものが地域で循環している。そんなことがミュージアムにはできるんです。ミュージアムは素晴らしく、大きな可能性を持っていると思います。(談)